

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1995
11

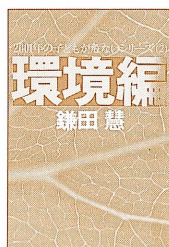


第94巻 第11号 日本幼稚園協会

2001年の子どもが危ないシリーズ

子どもたちを取り巻く様々な社会現象や問題点を各分野の第一人者が分析・追究、近未来の子どもの姿を予測した。子どもの心身の健康のために、さらに個性の伸長のために、環境を考え、我々大人がぜひ今すべきことの全てを提案します。

②環境編

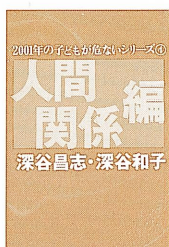


四六判 230頁 定価1,200円(本体1,165円)

第一線のルポライターの著者が子どもを取り巻く様々な環境を精力的に取材。21世紀の子どもたちの近未来を予測。

鎌田 慧
(さとし) 著

④人間関係編

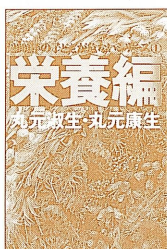


四六判 232頁 定価1,200円(本体1,165円)

「子どもが見えない」現代、21世紀に向けて家庭、学校、社会各々の環境下で大人と子どもの人間関係を模索。

深谷昌志・
深谷和子 著

①栄養編

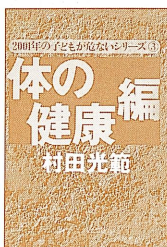


四六判 252頁 定価1,200円(本体1,165円)

飽食の時代の今日、豊かさをもたらした危険な食生活の問題点を分析・追究。未来に向けての食環境の知識を満載。

丸元淑生・
丸元康生 著

③体の健康編

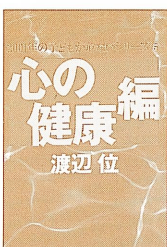


四六判 240頁 定価1,200円(本体1,165円)

高血圧、糖尿病、胃潰瘍、心身症…、成人病の影が子どもに忍び寄る。親子で真の健康教育を学ぶ究極の一冊。

村田光範 著

⑤心の健康編



四六判 230頁 定価1,200円(本体1,165円)

現代社会の激流の中で苦悩する子どもたちの心と長年付き合ってきた著者が原点に戻ることと知り得た心理とは!?

渡辺 位
(たかし) 著

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第94巻 第11号



幼児の教育 目次

— 第九十四卷 第十一号 —

© 1995
日本幼稚園協会

第48回日本保育学会講演から

対談「今、人間を育てる」(講師・津守 真／堀合文子 司会・秋山和夫)

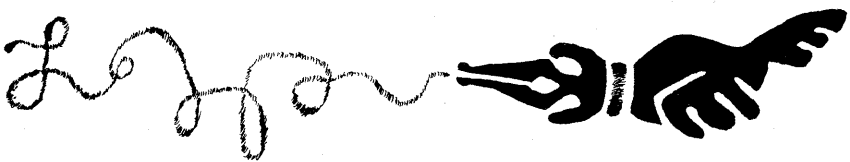
報告者・友定 啓子… (4)

震災後の子どもたち(2) それでも元気だよ！……………稲岡 康好… (16)

保育を裏付けるものを考える(1)

— 米国の幼児教育に光をあてて —……………森 眞理… (20)

動物行動の研究から(4) カラスに寄せて……………小山 幸子… (29)



どこの組のせんせい?.....榊田 正子... (37)

私の子ども時代(9) 沖繩^{沖縄}農村の暮らし.....眞榮田ツル... (42)

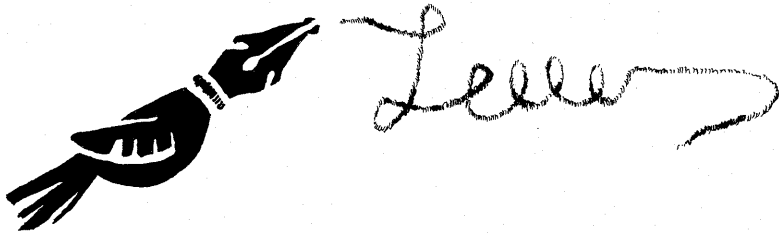
ここから先は子ども席 —— 観劇会周辺.....永野むつみ... (48)

ある日の育児日記から(59).....佐藤 和代... (57)

我が子らの集団生活をめぐって.....小園江幸子... (58)

表紙・松永 潤二／扉題字・津守 真
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園児
カット・彌永たたえ (不思議な文字)

編集委員・田代 和美
榊田 正子・伊集院理子
編集部・仲 明子・大沢 啓子



〔対談〕

今、人間を育てる

講師・津守 真
堀合 文子
司会・秋山 和夫

報告者・友定 啓子

はじめに

日本保育学会ではじめて、対談というかたちでの講演が行われた。津守真氏（愛育養護学校）と堀合文子氏（十文字幼稚園・元お茶の水女子大学附属幼稚園）の両氏である。司会の秋山和夫氏（山陽学園大学）は、この講演の趣旨として「明治の初めに『農学栄えて、農業滅ぶ』ということばがあったけれども、現在、保育学が非常に盛んになってきているが、我々が自重自戒すべきことは、子どもの現実を十分に踏まえた上で、学問を形成していくということである。そのためには、『保育』という営みとはどんなものか、十分認識することが重要である」と述べられた。

今の子どもはほんとうに違うのです

堀合 子どもは変わっています。世の中と共に

当然変わるのですけれども。お茶の水の時代にやっ

ていたことは、今はとてもやれませんか。今の子どもはほんとうに違うのです。三年前とも去年とも違う。ひとつはことばが達者になっています。それから、からだが大きくなっています。それでいて、人間として考えた時に、生活の面での行動が「原始的」になっています。これが極端に出ていて、からだ・ことばとたいへんアンバランスに育っているという感じを受けています。ですから、これだけ実践者として年月を経たのに、いまだに新しい人たちを受けるときに、どんな子なんだろう、どういう中味の子なのだろうと、新卒のように心配です。自分から「何かをする」とは毛頭考えられない子どもたちなんです。子どもが持って生まれた能力、人間としての力の上に、まわりから別のものが乗せられてしまったものですから、子どもは押しつぶされて、持って生まれた能力は下積になり、本来の力を出す

ことができないでいます。

幼児が自分自身になって遊ぶ姿

津守 ずっと昔、私がまだ大学生だったころ、はじめてお茶の水の幼稚園に行きました。三歳児が砂場の中で、ほとんど午前中いっぱい没頭して遊んでいる姿が心に残りました。その幼児の姿は、勉強がもしろくなった大学生が、勉強に吸い込まれるのと同じだと思いました。幼稚園は子どもが真剣に人間になっていく場所であること、幼児が自分自身になって遊ぶ遊びがどんなに大切かをこの時考えさせられました。

またこの頃、私は自分の正義感から三歳児の肩をつかまえて怒ったことがあります。その時、堀合先生に「あなたのはしたことは、三歳の子どもにすることではありませんでしたね」といわれました。それ

が今でも胸に残っています。どんなに正義感があっても「三歳の子ども」。その時これが抜けていたんです。いまだに、ここで学んだことの連続です。

アメリカでは新教育・進歩主義教育が一九〇〇年から三〇年代にかけて盛んになり、それが幼稚園運動として展開されました。倉橋惣三先生はこれをも本に入れようとされ、しかも、彼はそれを日本的性格を持ってされました。それは子どもと大人との間の、ある種の優しさとする種の厳しさを持った人間関係を大事にするものであったと思います。例えば、あの有名な『育ての心』の中の「飛びついてきた子ども」にもそれがよくあらわれています。

ばかりでいいんですか？」という質問を受けたりしていました。この誘導保育のよさをどうしたら明るみに出せるか、毎日克明な記録をとって、苦勞しなければ結局できなかったんです。そこで、堀合先生におたずねしたいことは、この時期のこの保育を、今どう考えておられるかということです。

「運動会って、なきゃいけないんでしょ、うか？」

堀合 附属幼稚園の中に津守先生の研究室がありました。私は毎日保育をし、津守先生は觀察にいらっしやるという日々でした。運動会、私はずっとそういうものだと思ってきましたのですが、第二学期が始まると種目が決まります。その中で、「おゆうぎ」だけはある程度練習しないとできない。それで、十時ぐらいに音楽が流れて、子どもたちは園庭に集まっておいこが始まるのです。うちの場合

は、その時代ではゆるやかな方だったんですが、それでも時間を区切って順番に練習をしていました。ある日、津守先生が「先生、運動会ってなきゃいけないでしようか？」、私は「ハッ？」、実はびっくりして、いうことばもなかったなと思います。子どもの記録の中に「あっ、また集まるのかー」などとブーブー言って、庭から上

がってくるというのがあるわけです。それに「このごろ、

子どもが夜中にとび起きるんです」「ぐずってしょうがありません」という声も父兄から聞いてはいたのですけれど。それじゃ、やっぱり集めるのは、子どもにとってたいへんなことだ、朝来てから一生懸命遊び始めて、それなの



にその生活がちゃん切られるわけですからね。それから、考え方が変わりました。次の年から、何とかして集めないでやれないものか、もちろん運動会はするのですけれど。

津守 一緒に記録をとっていると、学生さんが教えてくれるわけです。「この子いつもと違う、変だ」など。で、材料を持っていくと、堀合先生はびくっとして、立ち止まって、考えて、やり方を変える、そういうことが何度かありました。その後、運動会がどうなったかと言いますと、堀合先生のクラスは、全然練習しない。でも本番には子どもたちがしっかりやってくれて、めでたしでした。でもよく考えると、やってくれなくても別にかまわない。堀合 先生はやらなくたっていいんじゃないかとおっしゃっていたような。

津守 むしろ、本番が新鮮だから、すごい意気込みでやった（そうなんです）。

堀合 こういうふうに、津守先生には時々クツと言っていたいて、私も考えて変化してきました。

津守 そこで、第三者の目というのが重要になります。実践者は「自分がこれだけやったら、子どもがこれだけのびた」、「自分が子どものことは一番よく知っている」という気持ちになりやすい落とし穴がある。それを外からパッと見せてくれるのが研究者。

堀合 今はいへん申し訳ないけれど、お茶の水幼稚園のあの時やっていた保育は全く通用しません。四十年もごやかいになってこんなことを言うのは叱られそうですけれど。

あの頃（昭和三〇年代）は遊ぶことを、みんなそんなに大切にしていなかったように思います。どうしてみんなで遊ぶことをしないんでしょう、何かをやらせることはかり考えてと、ぼやいていたのを覚えております。「遊びが大切だ、遊びの中で指導す

るんだ」こういうことを全国に広めてくださったのは、津守先生だと思います。

津守 それはどうでもいいことで。そのうちに、研究者として観察しているだけじゃどうしても限界があつて、もっと子どもとかかわることで子どもを理解するという方向に変化していきました。

ある日私は砂場について、子どもたちがちょうを追いかけるのを見て、それをさりげなく逃がしてやりました。子どもたちは怒って私に砂をかけて来ます。それに應對するのには他人の目を気にして、砂を投げ返すことはしませんでした。これは堀合先生のクラスでのことで、さっきのあのことを思い出したんです。そこで、こんなことをすると、先生に叱られるんじゃないかと思ったんです。気まずいままに終わってしまつて、その後私は、ほかの何をさしおいても、その子たちとの関係は回復したいと考えました。これがその時「保育の場で私が最も大切

にしたいこと」でした。

次の機会に、あの子どもたちが、砂場で水遊びをしていて、「おじちゃんの足もうずめよう、靴ぬいで」と言い、「よし、ぬいでいくぞ」といって靴を脱ごうとすると、「ほんとうにぬぐかな？」と射すように自分を見ているのがわかるんです。それで、

私が砂場で靴を脱いで子どもたちと同じ地面に立つことができ、できたんです。それがきっかけとなって子どもとの関係を回復できたんです。この頃から第三者として研究する立場から、子どもとやり合うことによって子どもを知るという立場に変化して来ました。

最後に「子どもの行動を表現として見る」ことに、昭和



四〇年代なかばに行き着きました。私は自分の子どもの絵を捨てないでとっておき、何度も何度も眺めていました。二歳、三歳、四歳の初めの頃のめっちゃめっちゃな絵、そう見える絵を描いた頃の子どもの内面は混乱していたり、自分でも訳がわからないでいたりしているのです。外側から見るとめっちゃくちゃだけど、大人に見えないだけで子どもはちゃんと自分の心をそこに表している。その時に、「行動を行動として見るのではなく、表現として見る」ようになりました。

この考えの基本を作ってくれたのが、ルードビッヒ・クラークスの書いた『リズムの本質』という小さな本です。これをその当時、堀合先生は読んでおられた。

堀合 運動会のことがあったから、結局「音楽リズム」の考え方を一八〇度変えたのです。それをしないと、また練習、練習になりますから。その時代に

変えました。その時に読んだ本が同じ二本だったのです。

保育のことば——「集める・集めない」「指導」「教育」

秋山 今現場では、子どもが遊んでいる時に「集めることはよくない」というような、保育のかたちやことばに関する誤解が色々あるようです。先ほどの運動会でも「集めることで子どもの生活を切る」というお話がありました。これをどう考えたいのか、お二人にお聞きしたいのですが。

堀合 ことばと言いますと、その頃「お茶の水へ行くと、自由保育よ」とよく言われたものです。それに対してどなたかが「一斉保育」ということばをお作りになった。私がしていたのは、「まず遊ぶ。遊びを中心にして子どもを育てていく。子どもの生活を壊さないで保育者の方がかけていって保育して

いく」ということです。

毎日、まず遊ぶ。それは基本だけれども、その中で生活を崩さないで教育をしなければならぬ、これは頭にこびりついています。一人一人に対して、よく見てよく考えて、出ていかないと子どもは育たない。ことばでは言いにくいんですが、ある時は子どもがせっかく楽しく、あっちこっち走ったりしているのに、先生が「危ない」と先に言ってしまったら、ほんとうに危ないことをしそうなった時に声をかければいいのにタイミングがずれている。あるいは逆に先生が全く動かないで、指示するだけだったり。自由の形であっても一斉と同じことになってしまう。

私の若い頃の保育技術の勉強は、音楽リズム・製作・お話などが上手にできることでした。今は、もっと大事なところに技術があります。子どもをよくみて「もっと、手を貸してあげた方がいい」「も

うちよつとやらせた方がいい」「今、出ていった方がいい」などです。「何かをやらせる」というのは次のことです。これが今の保育技術で、保育者が自分の頭・からだ・心・神経を使ってすることです。この辺がたいへん難しく、ことばになると全然子どもとの状態とも違うし、こちらの出方も違ってくる。ことばにならないところを感じとって、それとうまくやっていくのがほんとうに重要だと思います。

「指導」とうっかり言うと、誤解されますが、ほんとうは指導しなきゃいけないんです。今の時代、教育していく場面もあります。けれども、「教育」は「教えこむだけの教育」ではありません。こういうことは成人した時にあっては困るということは教えてあげたいと思う。しかし、じゃあ、成人の姿から今を規定してやってあげてしまう。これを整理して、はっきりよくなさる先生もおられます。でもそれをやると、子どもには気の毒で、子どもの自分か



ら育つ能力を引き出すのが保育者の務めでしょう。今の子どもは、外から与えられたものが自分のものようになって出ている子どもが多いような気がしています。ほんとうのその人のもっている能力を出すようにするには、まあ、はっきり言って遊ぶしかないんですね。遊ぶ生活をさせる、そうすると、知らないうちに自分の力を使えるようになる。ところが、そこで「遊べ、遊べ」とだけ言っていると、「放任」ということになるので、そこに教育というものが処々にあると思います。子どもを教えてあげるといっても、あれとこれと言えないのが、幼児と保育者の関係かなとも思いますが。「あつ、ここは乗っちゃいけないんだな」と、子どもが自分から気づくように日常の生活の中で誘導する。外側から見えないところを育てていかないといけないと思います。

津守 実際の保育の場に出るようになって、一番思っているのは、「自分らしい保育をすることの大切さ」で

す。私には私の癖——考えの傾向——があるし、他の人にもあります。保育はみんな違っていい。かつては堀合先生の保育をモデルかと思っていたけれど、モデルはひとつではありません。それぞれが自分らしい保育をすることから自然にすてきな保育になっていくんじゃないでしょうか。「自分らしい」というのは、怒りたい時に怒るのではなく、それでは歯止めのない衝動的な言動に過ぎないので。保育というのは相手に即して、相手が何を欲しているかを敏感にキャッチして応答しなければならぬ。つきつめて言えば、生きているのは子どもで、子どもは自分で考えて決める。それに対して、大人も自分の考えを述べる。子どもに即して、一生懸命何を願っているか、何を必要としているか、欲しているかを察して、その人なりにそれぞれのやり方があり、それが自分らしい保育になる。

「集める・集めない」についていうと、ことばは大

雑把過ぎて、「集めない」と言う。「集めるのはいけない」になったりする。その時々、子どもの必要と状況があり、保育する大人も自分の状況（社会・自分の背景など）を背負っているのです、その声も入れて。ただしその時に、保育者として一番大切にしていることは何かということをも自分として常にしっかりとさせていることが大事です。

子どもは、きょうの私の気持ちを持っていてしまう

堀合 今の子どもは、大人以上の鋭さを持っていて、保育室に入ったとたんにふわっと私の心の中を持っていてしまうんです。何にも「おはよう」も言わないのに、きょうの私の気持ち、感情をみんな持っていつてくれる。それでいて、子どもがいろいろなことを逆にわかってしまう。別に（保育室の）中に入ってくれなくてもいいのですけれど、その人に

対して、私の心をどういうふうに動かしていくのがいいのだろうか、それこそ、寝ながら考えたこともある。その人に対する私の心の持ち方、愛情の持ち方を、すばやくとってくれて、何か言うをやめてくれたり、素直になったり、行動を変えたりして、それほど困らないことになっていくということを、ずいぶん体験している。今の

子どもに対しては、まず考えるのは大人の自分自身じゃないか、まず保育者が自分を生まれ変わるくらいに変えていかないと、今の子どもたちは変わって下さらないんだ。いくら一生懸命やっても、子どもに通じないんです。この「通じない」というところが、保育の実際の面で



秋山 最後に、若い先生方にこれだけは伝えたいということを。

当たるときは、それは捨てる覚悟で無になって子ども
 とともに生活する、保育者ということは捨てるわけ
 にはいかないが。また、研究者の方は少し角度を変
 えて、研究のための研究でなく、すぐには言わな
 いけれど、現場に役立つ研究をしていたきたい。
 津守「自分は人間として今成長しつつあるか」こ
 れはすごくむずかしいので、自分が言うのは気がひ
 けるけれど、この問いがないと、子どもがというこ
 とにはなっていないと思います。

おわりに

対談を聞いていると、お二人は立場は違うけれど
 も、同じ保育の場を共有しながら、互いに共鳴しな
 がら進んでこられたということがわかる。そしてお
 二人とも、それぞれの場で現在の子どもたちを見つ
 め、子どもたちと共にあるために、自分自身が変わ
 ることを第一にあげることによって一致しておられた。

おわりに

対談を聞いていると、お二人は立場は違うけれども、同じ保育の場を共有しながら、互いに共鳴しながら進んでこられたということがわかる。そしてお二人とも、それぞれの場で現在の子どもたちを見つめ、子どもたちと共にあるために、自分自身が変わることを第一にあげることによって一致しておられた。

「お茶の水幼稚園の保育は、今はとても通用いたしません」と述べる堀合氏の潔さ。それは誘導保育の終焉といえるかもしれない。けれどその背景は、子どもたちが重荷を背負いすぎて、自分自身の生活を作り出すことが難しくなっているからのようである。幼児が遊ぶこと、それを支えることは、何かを学ばせるために必要なのではなく、幼児が自分自身を見つめるために必要であること、それが現代の子どもには特に不可欠であることを、私たちはもう一度、心に刻まなければならないようである。

津守氏は、ご自分の保育研究者としての長いあゆみをたどりながら、相手を支えるための幼児理解について述べられた。氏がいきついたところは「子どもとかかわりながら、子どもを理解する」「子どもの行動を表現として見る」そして「対等な人間として子どもを見る」「そのために自分が成長する」。

不思議なことに、保育の場でこちらの気持ちの持

ちようは子どもにとってもよく伝わる。それが子どもとの関係に決定的に作用する。恐ろしいくらいである。「難しい子ども」ほどそうである。「難しい子ども」はこちらの期待に乗ってくれない。彼らは「自分がどう思われているのか」ということに、つまりこちらの心のありようそのものに、直接応答するよう思う。この根源的な関係性は、保育研究の組上に乗せられるのだろうか、あるいは乗せるべきなのだろうか、正直なところ考え込んでしまう。

人と人との関係を対象にする保育学こそ、科学性、客観性、実証性にこだわら過ぎて、自らの手を縛るのではなく、もっと生命性、個性、共感性を組み込んで、子どもの幸せにつながる学問にしていかなければならないと思う。冒頭の秋山氏の『農学栄えて、農業減ぶ』のことばが新たな形でまた響いてくる。

(山口大学)

震災後の子どもたち(2)

それでも元気だよ！



稲岡 康好

三学期の始業式にお餅をたくさんたべたのか、少し太って大きくなった子ども。よくしゃべる。お年玉の事、旅行に行った事、ランドセルを買ってもらった、机が来た。話す内容は大人も負けそう。元気いっぱい園庭を竹馬行進。

地震発生の一月十七日、午前五時四十六分。子どもたちはまだ眠っていただろう。裏六甲にある我が家から兵庫区にある幼稚園まで南へ南へと歩く。子どもたちは無事だろうか？ 幼稚園は崩壊していないだろうか？

兵庫区は大きな被害である。あちらこちらから煙が上がっている。幼稚園に近づくに従って、傾いた家、崩れた石垣、割れた道路。全壊、半壊の家、マン

シヨンの壁の一面がふつとんで一階から五階まで部屋の中がまる見え。布団が垂れ下がっている。新開地の交差点にある三菱銀行が無残にくずれ落ちている。銀行の裏にたしか陽子ちゃんの家があったはずだ。

幼稚園に到着する。外観はどこも壊れていない。玄関のガラスが割れている。職員室、保育室、他の部屋の戸棚も機器もまるで風に煽られたように散らばっている。

正門も通用門もこじ開けられ、近隣の方々が避難している。園庭は乗用車でいっぱい。主任教諭が出勤して来た。自転車で園区内を廻る。ひどい、あまりにもひどい状況。軒なみ将棋倒しの家。公園に、小学校に、中学校にと少しづつ子どもの様子が分かる。良かった。怪我をした子どもは今のところ居なかった。しかし、壊れたマンシヨンや傾いた家々。「幼稚園からのお知らせ」を貼って廻る。貼り紙を読んだ保護者が次々と幼稚園に来る。電話が通じないので歩いて、自転車で、来る。

二月十日(金) 一時登園日。二十六名の園児がやって来た。久し振りに正門に立って園児を迎える嬉しさ。お母さんと手をつないで、自転車にのって……。『お早ようございます』『先生……』『こわかったね』等々。

しかし元氣一杯な顔を見て安心する。

避難の方々と駐車場になって狭い園庭でそれでも子どもたちは逞しく遊ぶ。サッカー、なわとび、鬼ごっこ、固定遊具。ふっと耳に入った会話。『ぼくんとこ、みどり紙やで』『ぼくのとこは赤やってん』。震災で壊れた家の程度を行政が色別の紙を貼って示してい

る。その事が話題になっているのだ。「赤やってん」と言った子どもの少し淋しそうな、しょんぼりとした表情。

地震が起こるまでは元気で明るい女の子だった久美ちゃん。何だかとても不安定で無口、しきりに先生のあとを追う。久美ちゃんのマンションは全壊。避難所でもお母さんから離れない。

二月十三日(月) 本格的に保育再開。家に居ると片時もお母さんから離れないまきちゃん。指吸いがはじまった、でも幼稚園が再開されて指吸いが止まったとお母さんは喜ばれた。

電話で友達とお母さんが話をしておられた。安否を気遣っての話は長くなる。話の中で、エッ!! と声を出した、とたん遊んでいたおもちゃを放り出してお母さんの腰にしがみついた敏君。梨央ちゃんのマンションはみどり色の紙が貼られている、安全なしるしのにどうしても中に入りたがらない。幼稚園の避難所に居る。「お母さん、前みたいにお化粧してよ、今はきたない顔をしてる」と言うんです、とお母さんは訴えられた。

おとなしいけれどしっかりしている真奈ちゃん。神戸を後に広島島の因島に行ってしまった。マンションは無事だったのに。神戸から車で西へ西へ。真奈ちゃんは車の中で一言も話さない。何も食べない、赤ちゃんの弟と二人しっかりお母さんにしがみついたままだったとか。姫路あたりを過ぎた頃、「いえこわれてえへん」とボツリと言ったとお母さんが話された。修了式には兵庫幼稚園に帰って来ると言っていたのに。「神戸は怖い、もう帰

らへん」と言っとうとう帰って来なかった。

新学期が始まって子どもたちの様子に地震の怯えは感じられない。

女兒が数人段ボールで作った家に入って遊んでいる。男児たちがその家を大きくゆすつて「地震ですよ、あぶないですから早くにげて下さい」「ワーワーキャーキャー、お母さん懷中電氣つけなくちゃ」「まっくらよ、手をつないで逃げましょう」、鬼ごっこのように楽しそうに遊んでいる。何度も段ボールの家へ入ったり出たり。保育者は子どもたちに震災後遺症があるのではないかと、地震と言うことばを口にする事を恐れていた。子どもたちは環境に順応するのが早い、少し壊れた園舎の亀裂に竹や棒を差し込んで構成したり、小さいボールを投げ込んだりして遊びを作り出している。今、私の周囲の子どもたちは地震など忘れたかのように、あの日などなかったかのように、元気に遊んでいる。

(神戸市立丸山ひばり幼稚園)



保育を裏付けるものを考える(一)

——米国の幼児教育に光をあてて——

森 眞理

保育実践の裏付け探究への旅立ち

保育者は日々の保育を裏付けるものについて、すなわち自分自身がどういう視点で子どもの成長・発達を捉え援助していくか、省察する時を十分に持っているだろうか。

これは、筆者が一九九二年から一九九四年にわたり米

国において幼児教育を学んだ中で、幼稚園教師としての過去の自分を顧み、考えさせられたことである。

保育者として、一人一人の子どもの言動に驚いたり共感しながら、出来るだけありのままの姿を記録する。そして、その記録をもとに保育をすすめる。しかし、そこで判断の裏付けとなるものを認識していたか、と自問すると答えに窮する自分を見出したのである。

保育の場には、大小の積み木・ままごと道具・絵本・

絵画製作用の教材やぶらんこ・鉄棒、砂場等の遊具と、子どもが遊びを展開する空間がある。

「何を裏付けとしてこれらの環境を設定すべきなのか」

「保育者はどのように子どもと関わり合うのか」、こうした問いかけは、一保育者にとどまることなく世界中の保育者に問われるものであろう。

現在米国では、二十一世紀を目前にして幼児教育の内容を過去からふり返り検討している。筆者は、米国で、社会的背景とそれぞれの時代の保育を裏付けるものには、密接な相互関係があることを学んだ。

そこで、本稿では米国における幼児教育内容とその裏付けとの関係を探っていくことにする。

米国の幼児教育内容とその裏付けの変遷

米国の幼児教育は十九世紀半ばにドイツ移民のシュルツ夫人が米国における初の幼稚園を設立してから、およそ一世紀半に及ぶ。

その中で、現在の米国幼児教育に大きな影響を与えた社会現象を一つあげるとすれば、一九五七年の旧ソビエト連邦による世界初人工衛星打ち上げ成功による米国社会への衝撃であろう。いわゆる「スプートニク・ショック」である。

本章では、この「スプートニク・ショック」の前後から一九八〇～一九九〇年代に焦点をあてて考えることにしよう。

1 スプートニク・ショック以前の幼児教育実践 —精神分析論の視点から—

大恐慌の煽りを受けた一九三〇年代、第二次世界大戦前後の一九四〇年代、政治的、経済的に不安定だった米国において、幼児教育が担ったことは、まず健全でバランスがとれた子どもとの精神と社会性発達の助長であった。特にフロイトが展開した「子どもは感情的な生きものである、生まれながら持つ情欲・情緒の発達過程とその方向により人格が形成される」精神分析論⁽¹⁾が幼児教育

内容の展開に大きな影響力を与えた。

「遊びは子どもの心を表す手段であり、恐れ、不安などのネガティブな感情を表すことで、成人した際に神経症（ノイローゼ）になることを防ぐ役目があると見なした。」すなわち、子どもは、遊びによって言葉では十分に言い表せない家庭における悩みなど、内面にある感情を表出する。幼児教育は、こうした心的葛藤―苦悩を克服し、円満な人格形成の発達過程を辿れる環境を提供する場と考えられた。

具体的には、家庭の状況がそのまま再現される『うちごっこ』が奨励された。同時にお絵かきも多く取り入れられた。お絵かきは、事物を表現する芸術というよりは、感情表現と見なされた。

教師は、観察者・分析者・代弁者であり、子どもの心を把握することが要求され、積極的に子どもに関わることはあまり要求されなかった。教師は、一人一人の子どもの様子を記録しつつ、子ども同士が関われるように配慮をする。これは、子どもの自発性と社会性を身につけ

るようにとの意図からである。

この裏付けを基に実践をすすめていたのが、一九一三年にその前身が創立されたニューヨークのシテイ・アンド・カントリー・スクールである。ここでは、子どもの情緒発達の援助を教育目標として高く掲げ、ごっこ遊びを奨励した。この視点は、少し形を変えて後のニューヨークのバンク・ストリート・スクールやヘッド・スタート計画によるバンク・ストリート・アプローチに受け継がれている。

2 スプートニク・ショック以後の幼児教育実践

一九五〇年代は旧ソビエト連邦との『冷たい戦争』の真っ只中であつた。旧ソビエト連邦によるスプートニク打ち上げ成功は、科学教育の見直しと早期教育介入をもたらしした。同時に、公民権運動の台頭や当時の大統領ジョンソンが提起した『貧困と戦い』の一環として「貧困家庭」や「文化的に恵まれない子ども」への幼児教育の必要性が唱えられた。一九六五年にはヘッド・スター

ト計画として具体化し、様々な教育内容プログラムが開発され、施行された。その結果、相反する二つの教育内容を生み出した。

―行動主義論の視点から―

多くの貧困家庭の子どもたちは、知的学習技能を体得する環境に恵まれていない。すなわち読み・書き・数えるという学校教育に必要な三Rの基礎が確立していないのでこれに相当する環境を与えることが大切であると考えられた。

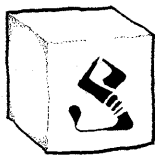
この背景が、「外からの要因が行動を作用し、決定する」⁽³⁾行動主義の考えである。中でも、スキナーに起源する「行動は報酬を受けると繰り返されるが、受けないと消滅する『道具的条件づけ』」⁽⁴⁾論理が支持され、ここを起点とする幼児教育が発展した。子どもは連続的な刺激と報酬により望ましい生活行動・学習態度・技能を身に付けると考えた。

イリノイ大学のブレイターとイングルマン・プログラ

ムと、その後編成し直されたオレゴン州におけるディスター・プログラムは代表的なものである。

ここでの子どもの活動は、時間割りによって決められている。一グループ五人以下の少人数の子どもが二〇分毎に言語・数・文字練習の活動を各教科担当教師と持つ。例えば、色の名前を復習する、一―一〇まで数える、母音、子音の発音を繰り返したりする。各練習時間の間にゲームや歌の時間がある。部屋は、各教科指導の小部屋とスナック用の大部屋に別れている。自由遊びは殆どなくごっこ遊びは物の分類・名称・性質を知るためにある。

教師は、常に子どもに何をするか提示する。そして、褒め、励まし、意図を満たしたものはシールや食べ物を与えてやる気を起こさせるのである。従って、教師は、計画を遂行する指導者であり、この計画を全うで



きるように特別の訓練を受ける。

こうした幼児教育の目標は、子どものIQ値を上げることであった。一九八〇年代になって、子どもの人格を無視し一人一人の未来の能力を抑制するとして批判を受け縮小されているが、現在でも普及されている。

— 認知発達論の視点から —

貧しい環境に育つ子どもの心身成長・発達を助長し、将来望ましい学校生活を送れるように、子どもの内面にある自ら成長する力とそれを取り巻く環境の関係を考える実践が重視されるべきである。これは、ピアジェの「子どもは、能動的な学び手である」という子ども中心の実践推進の考えである。ピアジェは、「子どもの知識は、周りの対象と個別に関わり直接的体験を重ねることから、周りの対象の構成を理解し豊かなものになる。」⁽⁵⁾と論じた。

幼児教育の場合は、子どもの自発性を助長出来るように『遊び』を重視した。ごっこ遊び・砂遊び・水遊び・ブ

ロック遊び等の様々な遊びが展開できる環境を設定することが求められた。

遊びの中で、子どもはしばしば問題に出会う。例えば、パズルで型に合うものと合わないものがあること、水遊びで浮くものと浮かないものがあることなど。子どもはその物のもつ特性や変換を、すなわち同化・調和する過程を自分の身の周りの環境と直接関わることで解決し、認識力を高めていくのである。

教師は、一人一人の子どもの遊びの環境設定者、興味・関心・発達段階を把握する観察者、問題に対し共に考える協力者、そして、子どもが自分で問題解決できるようにする援助者である。

これらの考えを土台にして教育内容を展開したのがミシガン州で一九六二年に始まったハイ・スコープ認知志向型カリキュラムに基づくプログラムである。ここでは、毎日子どもが自分の活動を教師の援助を受け計画・決定する。活動の中で子ども同士が関わる体験をする。また、一人一人の子どもが思いを分かち合う集まりの時

を持つ。そして、降園時に朝の計画をふり返り翌日への期待感をもつ。活動は、実体験を重視、動植物の飼育や栽培、家庭訪問保育や園外活動を通して地域とのつながりを持つことを推進した。

先に述べたバンク・ストリート・アプローチは、この認知主義論も取り入れた。一九八〇年代には全米各地にてカリキュラムとして体系化され導入された。

3 一九八〇年代後期

―『発達段階に応じた適切な実践』の視点から―

ヘッド・スタート計画の普及で幼児教育の重要性が見直された一方、一九八〇年代に入ると不況が全米を襲った。この影響で教育費・福祉費削減が著しくなり数々の幼児教育センターやプログラムが縮小、閉鎖した。同時に公立小学校の地域格差が大きくなる（米国の公立小学校は地域の住民税に負うところが大きく、地域の所得格差により、設備・教師待遇の差がある）と同時に、小学校に併設されている幼稚園の多くが研究費・設備費削減

から小学校の教育内容に近いものへと移行する傾向を見せた。

その様な状況の中で、幼児教育関係者が子ども中心とする幼児教育実践の推進を支持した。一九八七年、全米幼児教育協会（NAEYC）は、〇・八歳児を対象とした『発達段階に応じた適切な実践（Developmentally Appropriate Practices）』の教育概要を発行した。

子どもを全人格者として捉え、幼児教育は一人一人の子どもの社会的・認知的・身体的・感情的発達を理解し援助・助長することであると主張した。子どもの個性と年齢に適した実践を尊んだ。これは、「生後九年間、子どもに起こる成長・変化は万人共通なものであり、予測できるものである」が「一人一人の子どもは、この世において唯一の人間であり、その成長には性格・学習様式・家庭環境と同じ様に個人差がある」との認識⁽⁶⁾に基づくものである。

こうした裏付けによる実践は、子どもが自主性を持ち自由に関わり合い、遊びを繰り広げられるようにコー

ナー（砂・水・粘土・ブロック・絵本・レコード・絵画製作・おうちごっこなど）と子どもの年齢に応じた遊具・教材が備えられた。

教師は、まず子どもの心身の発達段階を理解して環境を設定する。そして、子どもと関わり、観察する中で活動内容を変容し決定する子どもの成長・発達の促進者である。

こうしてみると、『発達段階に応じた適切な実践』は前記の認知発達論の視点をさらに強調・発展したものであると考えられる。すなわちピアジェの考えが重視されていることがわかる。

4 一九九〇年代

―『多様化する社会・文化に適切な実践』の視点から―

一九九〇年代に入り、人種・性別に伴う行動様式や社会階級、更に民族・言語・宗教等の文化背景の多様性を尊重する気運が一層高まった。これに伴い『発達段階に応じた適切な実践』に対して批判の声が上がり、実践を

裏付けるものを見直すことに至った。

ジブソンは、『発達段階に応じた適切な実践』はピアジェの西欧的視点による子どもの発達理解であり、文化的偏見を伴い、子どもの認識取得範囲を狭くする⁽⁷⁾との展開を示した。例えば、子どもは、遊びを通して様々な心身機能を発達させていく。しかし、ピアジェの成長発達の評価対象となるのは、『言葉』と『論理的数学思考』が中心である。ジブソンは、何を知識とするのか考え直し、広い視野で文化的背景を考慮し、子どもを捉えることを助言している。

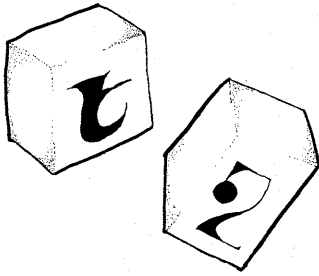
また、ケスラーは「今までの幼児教育は発達心理学のみに実践の裏付けを求め、哲学的、政治学的考察に欠けている」⁽⁸⁾と述べた。子どもをどのように捉えるかは、社会・地域・家庭によって各々価値観が違うであろう。何を基準にして『適切さ』を決めるのか、子ども同士・子どもと教師・教師同士・教師と保護者、そして教師と行政関係者等との話し合いを繰り返すことを支援している。

これらの指摘は、「社会の中で、子どもは自分の身の回りの人間との関わりによって、成長・発達する」⁽⁹⁾と述べたヴィゴツキーに拠るところが大きい。

教師は、子どものありのままの姿を受け入れることを大前提とすることが必要である。それは、ハワイのカマハメラ幼児教育計画（KEEP）における実践のように、子どもの生まれ

育った言語を尊重しつつ、共通語としての英語も導入することであろう。子どもは自分の文化背景を享受しつつ、相手との違いを認め合える人間として豊かに成長していくのである。

一九九〇年代の幼



児教育は、一人一人の子どもが幼児教育の場に携えてくるものを認識することを重視している。と同時に、教師自身の文化背景を知ることが、子どもに接した際、違いに対して受け入れ、理解しようとする態度に成長しうるであろう。

米国の幼児教育内容が提言するもの

米国での幼児教育の変遷を眺めると、それぞれの時代の社会的状況が大きく実践に影響を及ぼしていることがわかる。現在米国では発達心理学にとどまらず、幼児教育者が視野を広げ、政治・経済・文化等に関心を持ち、社会のニーズと呼応しつつ実践をすすめていくことが提言されている。

一人一人の子どものありのままの姿を受け入れることは、子どもの背景を含めて全人格を受容することである。これは、公正な社会を担っていく人間を育てる出発点であろう。

本稿では特に米国の幼児教育内容の変遷と裏付けけるものとの関係に焦点をあててきた。

それでは、幼児教育の実践の場では、どのようなことが展開されているのだろうか、また、筆者を始め、日本の保育者が米国の幼児教育内容とその裏付けけるものから学ぶことは何か。次稿にて、展開していきたいと考えている。

(東洋英和女学院大学短期大学部)

引用文献

- (1) Weber, F. (1984). Ideas influencing early childhood education. New York: Teachers College Press. 104-119.
- (2) Spodek, B. (1991). Issues in early childhood curriculum. New York: Teachers College Press. 1-20.
- (3) Mounts, N.S. & Roopnarine, J.I. (1987) Application of behavioristic principles of early childhood education. Approaches to Early Childhood Education. Ohio: Merrill Publishing Company. 127-142.

(4) 右と同一

- (5) Piaget, J. (1975). The development of thought: Equilibration of cognitive structures. New York: Viking Press.

Viking Press.

- (6) NAEYC (1986). Position statement on development on developmentally appropriate practices in programs for 4-5 year-olds. Young Children. 41(6)20-29.
- (7) Jipson, J. (1991). Developmentally appropriate practice. Early Childhood Education and Development 120-136.
- (8) Kessler, S.A. (1991). Early childhood education as development. Early Childhood Research Quarterly. 2 137-152.
- (9) Vygotsky, I.S. (1978). Mind and society. Cambridge, MA.: Harvard University Press.

カラスに寄せて

小山 幸子

このところ少し落ち着きを見せてはきたが、我が家の近くでは一時期カラスによるゴミあさりやひどくてとても困っていた。ある日などは、断じてゴミあさりを許さじと、ゴミ収集車が来るまで母がゴミ集積所でカラスとにらみ合いを演じるという一幕もあったほどだった。その母が、夜、私に向かっていわく、「カラスってもうどうして生ゴミの入っている袋がわかるのかしらね。匂いかしら」。

この推測は、残念ながらはずれている。鳥類は、実は、一般的に嗅覚は退化しているのだ。例外的に嗅覚が発達していることがわかっているのは、腐肉を食糧としているヒメコンドルなどだ。そして、鳥類では、一般に視覚が発達している。つまり、ゴミ袋自体がすでにエサとして認識されているだろうが、その上にこれみよがしに生ゴミが外から見えていたらつついて穴を開ける場所を明示しているようなものなのだ。少

なくとも生ゴミだけは小袋に入れてからゴミ袋に入れるなど、二重にも三重にもして見えないようにすると随分とカラス対策としては有効だろうと思うが、我が家以外では意外なほどにこのようなちょっとした注意を払っていない家が多いので困ってしまうのだ。

どの感覚器官が発達しているかには、どのような環境に生息しているかが関連していると言われている。

樹上を主要な生活圏とし、空を飛ぶ術を身につけた鳥類にとっては、嗅覚が発達しているよりは視覚が発達している方がはるかに役に立つだろう。上空からせっかくいろいろ見えても、近視だったり色覚が欠落しているではせっかくの視界が有効利用できない。

鳥の場合、視覚と並んで発達しているのは聴覚だ。

ただし、その発達のしかたは、幅広い音域を聞いたり幅広い音域で発声することができるといよりは、音の微妙な違いの聞き分けや微妙な違いでの発声が可能という発達のしかたのようだ。飛行能力の獲得によって広い空間を移動可能になった鳥にとっては、例え

ば、超音波によるコミュニケーションはあまり意味がない。周期が非常に短く、したがって単位時間あたりの周波数が非常に多い音波を超音波と言い、「超」がつくつかつかないかは人間の耳に聞こえるか聞こえないかによっている、音としては周波数が数値的に大きいほど高い音だが、音波は周波数が高いほど遠くまでは届かなくなるという。例えば、さえずることで自分のなわばりを宣言するとしたら、かなり遠くまでそのさえずりが届かなければあまり役に立たないことになるから、極端に高い音声は出す必要がない、というよりは無意味だろう。また、かといって、逆に何キロも先まで届くような長い周波の超低周波音も、やはりなわばりよりもはるかに遠くまでなわばり宣言が届くことになり、これも無意味だ。そこで、鳥類の場合には、比較的限られた音域の中で、鳥によってはかなり複雑なメロディーでさえずることになり、しかもそれが人間の耳にも聞きやすい音域だということから、鳥の声を愛でる文化をも生むことになったわけだ。

さえずりの学習

ところで、鳥のさえずりに関連して、知られているように知られていないのはさえずりの学習の話だろう。鳥の中には、おとなになってからのさえずりのしかたをヒナのうちに学習しなければならない種類がある。アメリカで行われたミヤマシトドという種類の鳥の研究では、さえずりの学習には臨界期があることや、ミヤマシトド以外の鳥のさえずりまで何でも学習してしまうことがないような仕組があることがわかっている。臨界期というのは、学習のいわばタイムリミットで、一方、学習に最適の時期は敏感期とか感受期と呼ばれている。人間でも、例えば、語学学習の特に発音の習得には何歳ころまでなら比較的習得が容易だという時期があると言われる。ミヤマシトドの場合、さえずりの臨界期は五十日令頃だという。これは、巣立ちした後まだ親鳥と行動をともにしている頃だろう。臨界期が五十日令くらいなら、感受期はそれより前だから、おそらくは孵化して多少羽が生えてき

た頃が最もさえずりの学習がすすむ頃なのではないだろうか。孵化後二、三週間の頃と推測される。そして、これらのことは、ミヤマシトドのヒナにとってさえずりの学習のモデルとなるのは主に自分の父親だということを示している。

ミヤマシトドのヒナを親鳥から離し、まわりの音も聞かえないような環境で単独で育てると、ヒナはさえずりの学習をすることができない。そのようにして育ったヒナは、オスのヒナであれば、それでも翌年の春になると、雄性ホルモンの作用によってさえずりらしきものを出しはじめる。けれども、それは、若干ミヤマシトドのさえずりの特徴を有するものの典型的なさえずりのパターンからはかけ離れたものになってしまっているという。このことは、学習がいかに正常なさえずりをするにとつて重要であるかを示しているが、その一方で、若干はミヤマシトドのさえずりの特徴を持っているということから、生まれ持ったものも多少はあることを意味している。

春になってさえずり出しはじめた時、前の年生まれの若いオス鳥は自分の出した声を耳で確かめながらさえずりの練習をする。モデルとなるものをヒナの時に聞いていない若鳥は、この時に試行錯誤でさえずりの練習をすることになる。いわば、練習しながら心の声を頼りに修正していくことだろう。では、心の声は、発声のしかた、つまり音声を出したときの喉の感触に物申すのだろうか、それとも出した声を聞いた感触に物申すのだろうか。この答えはどうやら後者らしい。自分の出した声を聞こえないようにしてしまうとミヤマシトドの種の特徴はまったくなくなってしまうらしいのだ。つまり、自分の耳で確かめながら発声することがとても大事だということになる。

一方、何を学習するべきかということは、生まれながらにヒナは心得ているらしい。巢のまわりで聞こえるさえずりは当然ミヤマシトドのさえずりばかりではないわけで、何でも学習してしまったらとても大変なことになってしまう。ミヤマシトドのさえずりでない

と学習しないように学習のモデルとなるさえずりを選別する能力を生まれながらにヒナは持っているのだという。この生まれながらに持っている選別能力は型板と呼ばれ、これを持っているという説は型板仮説と呼ばれている。

確かに何でも学習してしまうといろいろなさえずり方をするミヤマシトドがいることになってしまつて大変だろう。けれども、考えようによつては、これは何だか変な話だ。なぜなら、そんなことなら最初から学習しなくてもいいようにすれば良さそうな気がするからだ。なぜ学習しなくても良いようになっていないのだろうか。その理由には、どうやら方言の存在が関係しているらしい。つまり、ミヤマシトドのさえずりには、種に特有のパターンがある一方で、まさに人間の場合の方言と同じように地方によって微妙な違いもあるというのだ。しかも、この方言は結構重要な役割を果たしていて、メスのヒナは生まれ育った地方でなさえずり方をするオスを好むのだという。つまり、オス

にしてみると、方言を学習しておくことはつがい相手を得ることができるかできないかを左右することになると言える。そして、言い換えれば、このことは、さえずりの学習にはさえずるオスだけでなく、さえずらないメスも関わっていることを意味している。鳴く側だけでなく、聞く側にも学習は重要なのだ。

コミュニケーション方法の学習

樹上を主な生活圏とし、空を飛ぶ術を得た鳥の場合には、必要性の小さい嗅覚が退化して視覚や聴覚が発達し、コミュニケーションのしかたもそれに伴って音声の主たる手段とする方向へと進化した。このことは、特定の生息環境への適応が体の構造だけでなく、コミュニケーションのしかたにも影響を及ぼすことを示している。そして、さえずりのしかたを学習しなければならぬ種類の鳥がいるということは、学習が必要な特性は主たるコミュニケーション手段の中に多いのかもしれないと推測させる。成熟までの時間の長さ

や脳の大きさ、社会形態、等も種による学習必要性の大小を左右するだろう。

地上を主な生活圏とする哺乳動物の中には、嗅覚が発達している種類がかなり多い。実験動物としてよく使われるマウスもそのような動物の一種だ。マウスの場合には、視覚はあまり発達していない。聴覚は、音域としては非常に高い音域でコミュニケーションを行っている。チューチューと人の耳に聞こえるのは彼らにとっては最も低い音声で、ほとんどの音声は人間には聞こえない超音波の域で行っている。強力な武器を持つでもなく、餌の対象となることの多い彼らにとってはあまり遠くまで声が伝わってはかえって困ることだろうから超音波での会話はとても理にかなっている。けれども、マウスの場合、コミュニケーションの手段としては嗅覚の方が中心だろう。嗅覚を主要なコミュニケーションの手段としていっているとよいかではないだろうか。

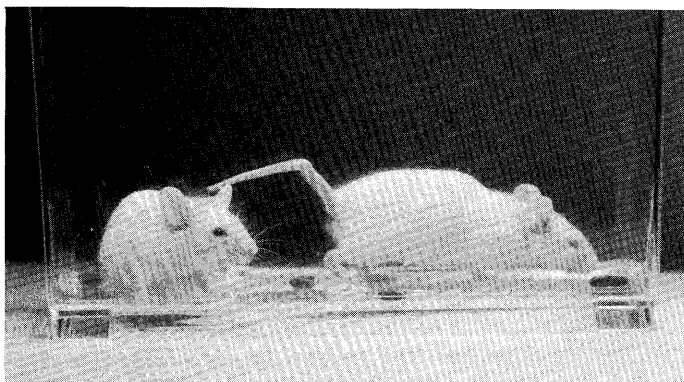
以前、そのマウスを小さい時から単独で飼育する実

験をかなり行つた。生後三週令で親から離し、互いの姿が見えないようにして飼つてみたのだ。三週令というのはようやく離乳できるぎりぎりの時期だ。そして、十五週令頃になったら、隔離したマウスどうしを出会わせて観察する。十五週令というのはもうとつくに性成熟も過ぎた時期だ。そうするとどうなっただろうか。行動はまずやはり異常になった。そして、この場合、どのように異常になったかというと、他の個体の匂い、それも特に生殖部位の匂いをあまり嗅がなくなつてしまったのだ。

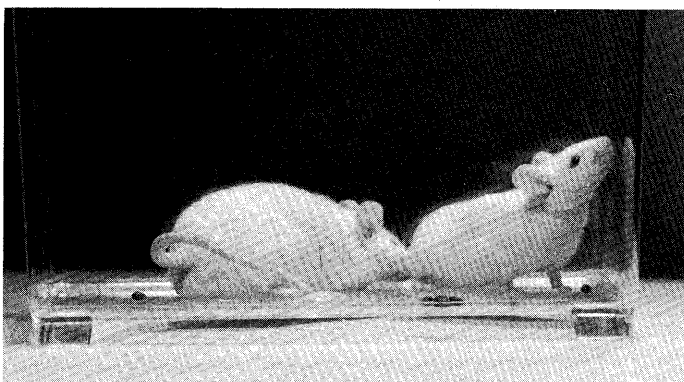
これは、実はかなり異常なことだ。

散歩に連れ出してもらつたイヌどうしが道ではちあわせした時にどのような行動を取るかを見たことがあるだろうか。吠え合ったり、大喧嘩になった場合は別として、まず、お互いのお尻の匂いを嗅ぎ合うのを見たことがきつとあるのではないだろうか。あれはイヌどうしのいわば情報交換だ。相手がどういふイヌかを調べているのだ。

マウスの場合には、匂いを嗅ぐことで相手の生理的な状態だけでなく強弱までもわかつてしまうという。そして、これらのように情報を伝達するための匂い物質が存在することもわかつてきている（フェロモンと呼ばれる）。この匂い物質を分泌する腺は、体のあちこちにある。そして、動物によってどこにあるかが違っている。例えば、人間の場合（人間にもある！）、脇の下や足の裏、生殖部位、耳などいくつもの腺があるのがわかつている。生殖部位はかなりの動物に匂い物質を分泌する腺のある場所として共通している。イヌやマウス等が、お尻の匂いを嗅ぎ合うのはそのためだ。そして、隔離をして育ててしまうとお互いの匂いを嗅がなくなるといふことは、匂いをお互いの情報交換に利用するには学習が必要だということを意味していることになる。鳥の場合に隔離して育てると正常にさえずることができなくなり、音声によるコミュニケーションが不可能になると同様に、マウスの場合には隔離して育てると嗅覚によるコミュニケーション



①左のマウスが右のマウスを注視して接近



②お尻の匂いをかく



③典型的な降参のポーズ（左）

ションができなくなると言えよう。

マウスのようにさほど社会性が高くなく、成熟も早く、脳も小さな生き物でさえそうなのだから、かなり高等な霊長類であれば、隔離の影響はかなり深刻だろうということは容易に推測できるだろう。ニホンザルは非常に社会性が高く、成熟までも四年もかかり、脳の大きさをマウスと比較するのはおよそ無意味とも言える動物だろう。そして、ニホンザルの場合には、隔離の影響は非常に多種多様に大きく現れることがわかっていいる。オスであれば、たとえば互いに遭遇した時の挨拶行動を取ることができなくなり、メスでは子育てもできなくなる。そして、このように様々な学習に必要な行動の欠落が見られるだけでなく、檻に体をぶつけつづけたり、自分の体を噛んだり、等々たくさん異常な行動を示すようになる。これらの異常な行動は、人間の鬱病や自閉症の症状と類似しているとも言われ、鬱病や自閉症の研究にも使うことができるのではないかと語られている。社会性が非常に高い動

物を単独にすることは、ただ単に学習しなければならぬ行動を学習できなくさせるだけでなく、いわば孤独症候群とも言えるものを引き起こしてしまうのではないだろうか。

冒頭に紹介したカラスは鳥類の中ではトップクラスに賢く、また社会性の高い生き物だ。恐らくは、幼少期からたくさんのかたを学習しながら育っていくのだからと推測できる。我が家の近辺で一時期ゴミあさりかひどかつたのは、その頃は育ち盛りのヒナのために親鳥が最も忙しく餌を集めなければならなかつた時期だつたのではないかと思う。最近では、ゴミあさが減つた代わりに電線や電柱の上でまだ鳴き方のへたな巣立ち後間もない子カラスの姿を見るようになったからだ。彼らはきつと電線や電柱の上から人間の姿や行動をつぶさに観察し、人間への対処法を学習している、真つ最中なのではなからうか。そんなふうにとちよつと短めの尻尾をした子カラスの姿はとてもいじらしいものにも見えてくる。(聖徳大学短期大学部)

どこの組のせんせい？

梶田 正子

「ね、アイスクリーム。食べてもいいよ」

砂場で小さな容器に砂と砂利と水を入れてかきまわしていた三歳のT男が、私を見て声をかけた。

「あらおいしそう。ありがとう。いただきます」

しゃがんで食べ始めた私を見ながら、T男は、

「先生、どこの組の先生？」

とたずねた。一瞬、どういう答え方をしたら子どもにわかりやすいだろうと迷ったが、適当な表現が見つからないままに、

「先生はね、幼稚園全部の先生」

と答えると、T男はよくわからないといったキョトンとした表情で、

「何の組にいるの？」

と重ねて聞いた。

「先生たちのお部屋にいるの。でも○の組のお部屋にも△の組のお部屋にも遊びに行くのよ」

と言いなから私は、これもわかりにくいなともどかしく思う。案の定、T男は納得がいけないという様

子で、

「フーン」

と言ったが、それ以上はたずねなかった。

「ああ、おいしいアイスクリームでした。ごちそうさま」

私は、何となく会話が中途半端になってしまっていることにうしろめたさを感じながら、アイスクリームに助けを求めるような気持ちで言う、T男は、

「また来ていいよ」

と、先の明るい調子に戻って言った。

一学期の間、私はよく、その春入園の特に三歳の子どもたちから「どこの組の先生？」とたずねられた。自分が○の組の一人であり、自分の担任の先生は○の組の先生、年長のお兄さんやお姉さんもみんな△の組や□の組と、所属するところが決まっているらしいことがわかってくる頃の質問である。子ども

もたちにしてみれば、顔見知りではありながら「何の組の先生よ」と明解な答の返ってこない先生の立場は、幼稚園理解の上でどうもおさまりの悪い存在のようで、それがわかるので私も、彼らになるべく混乱させないようにと答え方を迷ってしまうのである。

幼稚園の環境を自分の生活の場として認識し、その中で安心して自己を発揮できるようになるまでに、子どもたちはそれぞれに様々な様子で状況を受けとめ、そのプロセスを経験していくのであろう。子どもたちがチラッと見せてくれる姿に、幼稚園の場を少しずつ自分自身のものとしていこうとする様子がうかがえるのである。

殆ど毎朝のように、登園時間から約二十分ぐらいの間、三歳の保育室の廊下に面した出入口に、その組のH子の姿があった。出入口のドアに片手でつかまり上半身を乗り出すようにして、登園してくる母

子たちであわただしい廊下の様子を見ているのである。他の子どもの出入りとぶつかったりして、はずみで廊下に出てしまうこともあるが、あわてて元の体勢に戻るその姿には、安心できる自分の本拠を確保しつつ外の世界にも出かけて行きたいH子の気持ちが表れているように思われた。そして大抵、私が次々と登園してくる子どもたちを出迎えることにとりまざれているうちに、いつの間にか入口に近い廊下や園庭でも遊び始めているH子であり、彼女の笑顔にふれて私はホッとすることが多かった。担任の先生の支えがあったのかもしれない。H子にとっては、安心して過ごせる自分の保育室とその外側との間には通過に努力を必要とするほどの隔たりをまだ感じるであろう。そのH子は、お弁当の前や降園時になると泣くことが多かったと担任から聞いた。H子のよりどころである保育室がいつもの遊びの雰囲気からお弁当や降園の支度へと変わっていく時、彼女の気持ちの安定がフッとゆらぐようであった

が、一学期の終り頃にはそんな時に泣くことも減ったようである。



おっとりしたD男は、毎朝登園の時玄関に立っている私を見つけると、ニヤッと笑って、助走をつけるように二、三步小走りをしてから両足を揃えてピョンと跳ぶ。無言である。その後はまっすぐ保育室に入って行くのである。三歳の中でも体重のある

D男のその動きは決して軽やかではないが、彼が全身で何かを表現しようとしていることは伝わってくる。いつ頃からその動作をするようになったか、またその動作が何を意味するものなのかはつきりはわからないが、私が彼の動きに合わせて手を打ちながら「ピョーン」と相槌を打つのを期待するような表情から、D男がその独特の動作によって受け容れてくれる人のいる場へ自ら入ろうとしているかのように私には思われて、いつの間にか私の方も、そんなD男とのユニークな朝一番のコミュニケーションを心待ちするようになってきていた。

同じく三歳のM子とY子は、一学期後半、背中におぶいひもで人形を背負い、ままごと用の乳母車（ぬいぐるみの動物が乗っていることもあるが空っぽのこともある）を押して、幼稚園の廊下の中ほどに位置する職員室にしばしば顔を見せた。

「おさんばに行くところなの」

「そう、気をつけて行ってらっしゃいね」

「うん」「行ってきまあす」

私が席から立って職員室の入口まで見送ると、M子とY子はゆうぎ室の方へ向かって歩いて行く。四歳や五歳の子どもが多く往き来している廊下を、背中に背負った人形と両手で押して行く乳母車に支えられてようやっと歩いて行くような二人の後姿である。そして多くの場合、私が自分の椅子に戻るか戻らないうちに再び職員室に入ってくる。

「あらMちゃんとYちゃん」

「何もなかった」

「そう、残念だったわね。それじゃお部屋まで帰りますしょうか」

「うん、先生も一緒に帰る」

「そうね」

こんな流れで、今度は私も含めて三人で彼女たちの保育室まで戻ることが多かった。

M子とY子の保育室は廊下の端にある。部屋を出

て廊下を見通すと、つきあたりのゆうぎ室までの間に四歳や五歳の各クラスがあり、思い／＼にひろげられた遊びやお店屋さんごっこの屋台が見えたりして、楽しい興味深い光景である。しかし入園後間もない三歳の子どもにとって、自分の部屋やそこに居る担任の先生を後にして長い廊下を歩いて行くことは、簡単なことではないだろうと察することができる。身につけた物、手に持った物、扉が開いていて中に見知ったおとながいる途中の部屋、緊張をやらわげることができるかかわり、そして共に行動する仲間、これらすべてがその時の子どもへの支えになっているにちがいない、こうして子ども自身の場や生活は少しずつ広がっていくのであろう。

冒頭の事例で、「どの組の先生？」とたずねたT男をキョトンとさせてしまった、担任を特にもたない私の立場も、ここに挙げたように様々な子どもたちの姿に出会い、彼らの支え手になることもしばし

ばである。しかし、特に年少の子どもの場合、幼稚園を安心できる生活の場ととらえられるようになるには、担任の先生への信頼感が何よりも中心的な基盤である。私は自分と子どもたちの接点が、担任の先生と子どもとの信頼の関係の中にスムーズに組み込まれるものであるように思っている。

M子とY子と共に彼女たちの保育室に帰った時、部屋に居た担任の先生に、二人が息を弾ませて、

「ただいまあ」「おさんぽに行ってきたの」

等と口々に伝える様子を見ると、私はホッとするのである。

二学期になり、子どもたちは一学期とはまた違う面を見せてくれてもいる。どんな出会いがあり、どんなかわり方ができるのだろうか。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

私の
子ども



沖繩^{ウチナー}

農村の暮らし

時代 (9)

眞榮田^{まえた}ツル

私は、大正三（一九一四）年十一月十九日に
生まれた。今年で満八十歳になる。生まれたところ
は、沖縄本島の北部、羽地村^{はじまち}（現在の沖縄県名
護市）で、現在は、沖縄市（旧コザ市）に住んで
いる。旧姓は、永田といった（羽地村は、田の深
いところといわれ、昔から沖縄最大の水田地帯で
あり、篤農家の多い地域）。家族は、両親と八人
姉妹の十人で、私は、その五番目だった。家は
農家だった。

子どもの頃は、よく裸足で村のなかを走り回っ
て遊んでいた。普段は、履物を履くことがなかつ
た。ただ、年に三回くらいお祝いの時などに下駄
を履かせてもらえることがあった。お正月には、
鞆や下駄を買ってもらえるのがとても楽しみだっ
た。

小学校にあがる前までは、家の手伝いをするこ
とがほとんどなかった。山のほうに住んでいる人
たちは、薪を取りに行ったり、食べるものをさが

したりしていたようだった。私たちは、食べる物に不自由したことはなかった。

学校にあがる前は、お家でたんぼを作っていたので、親について行って蛙をとって遊んだり、泥遊びをしたりした。海（羽地内海。沖繩の松島といわれているくらい海がきれいで、景色の良いところ）がお家のすぐ近くにあったけれど、海に泳ぎに行くことはまったくなかった。だから今でも泳ぐことができない。旧暦三月三日の（浜下り）や潮干狩りにはよく行った。近くに川があったので、そこでよくエビやカニをとって遊んだ（浜下り）の実態は、春の大潮の日に行う潮干狩りであるが、単に貝を拾うだけでなく季節のめぐりを祝って、潮で身を清めるという意味がある。本来は、内地の雛祭りと同じく、女性たちの行事。海に入らない場合は、潮を足で三回蹴ると汚れがとれるといわれている。沖繩には、蛇の子を身ごもった女性が神のお告げにしたがい旧暦の三月三

日に潮を三回蹴り、蛇の汚れを落としたという故事がある。そのほかに縄跳び（大縄跳び）、石けり、けんけん（地面にかけた線をめがけて石を投げる遊び）、高跳びなどをして遊んだ。高跳びは、今でいうと体育の時間にする走り高跳びと似たようなものだった。おもに男の遊びだったけれど、部落の集まりなどに行くと、子どもどうしで一緒に遊んだものだ。ある時、高跳びの棒をうまく跳び越すことができなくて、自分の膝で目のあたりをけりあげてしまい、顔にあざを作って学校を休んでしまった。この時は、あとで父親にずいぶんと叱られた。

家では、石なぐ（丸い石を拾って来てそれをお手玉のようにして遊ぶ）やお手玉などをして遊んだ。布を袋に縫って、なかに石ころや砂を入れたものをお手玉にした。小豆などは贅沢で入れられなかった。お手玉を三個同時に使ったり、後ろ手で使ったりといういろいろな遊び方があった。

お正月には、普段は着られないような新しい着物を着させてもらえた。この時には、下駄や草履を履いた。そのほかに、いつもは食べられないお米（白米）を食べることができた。旧暦の十二月二十七日から二十九日ころには、部落で豚をつぶしてごちそうを作った。豚は、四、五軒に一頭くらしいの割でつぶす。こういう時は、学校に行くのがいやなくらい楽しかったものだ。

普段は、自給自足の生活を送っていた。芋（唐芋、琉球芋）が主食で、お祝いの時には、田芋やタームジ（田芋の茎を干したもの）を食べた。

年中行事は、たいてい部落ごとに協力して行っていた。かぞえの十三歳になると、女は（十三祝い）をした。晴れ着を着せてもらい、家族でお祝いをする。姉が大阪から名古屋の紡績工場に働きにいったので、モスリン地のしゃれた着物を送ってもらい、それを着た。姉のような（紡績婦）の人たちは、ハイカラな格好をしていたの

で、地域の人たちから笑われたものだった。そのうち、だんだんと彼女らの影響を受けて、沖繩の伝統的な（ひろ袖）の琉球着物を着る人が少なくなり、袂のあるハイカラな着物を部落の人たちも着るようになった。

子どもが生まれると、出生祝いをした。白米を炊いて子どもの誕生を家族で祝う。子どもの名前は、親がつけたと思う。私は、父親が名づけた。山原（本島北部）の方では、童名を付ける習慣がなかった。那覇の方では、童名を付けていたようだ。

山原では方言を使うということはなかった。親たちも方言を使わず、〈標準語〉を使っていた。稲嶺（現真喜屋）尋常小学校にあがると、方言を使うことが禁止された。私たちは、小さいころから標準語を使っていたので、方言を使って叱られることはなかった。なかには、方言を使っているから先生から方言札を渡される人もいた。札

は、友達が方言を使うのを見つけるまでもっていなければならなかった（そのため、友だちの足をわざと踏んで、「あ、痛い」と方言でいわせて、札を押しつけるということがあったという）。札を渡されたことがないからよくわからないけれど、渡されるときは、ただ「はい」と手渡されたようだ。罰を受けた子どもが札を首に下げていたという記憶はない。方言札は、学級に二、三枚くらいあったと思う。

学校の先生には、とても親しみを持っていて、尊敬していた。家庭訪問の時が楽しみで、先生がお家にみえると、ゴザでできた座布団をさっと玄関に敷いた。自分のお家に先生がみえるということがとても嬉しいことだった。先生を神様みたいだとも思っていたので、怖いと思うことはなかった。

怖いのは警官だった。悪いことをしていないのに、巡査を見るとなんとなく怖かった。巡査に道

ばたで出会うと、必ず会釈をした。

休み時間に先生と一緒に遊んだことはない。受け持ちの先生は、那覇出身の方で、二十六歳の若さで亡くなってしまった。先生が病気で学校を休んでいる間、先生のお家に卵や砂糖をお見舞いに持っていた。両親は、学校の先生のためならと卵を三、四個も持たせてくれた。当時、卵はとても貴重なもので、めったに食べられなかった。砂糖は、真喜屋の部落にサトウキビ畑があり、収穫したサトウキビの茎を水車で挽いていたのを覚えていた。そのの近くにいくと、地面にこぼれた砂糖をなめるのが楽しみだった。当時は、そういうことを汚いとは思わなかった。

あの時代は、なにかも平和だった。人と人との心のつながりがあって、例えば夜になっても、扉を閉めて寝るなどということもなかった。

亡くなった受け持ちの先生は、金城栄治先生（きんじょう へいち）といった。ずっと後になってから、唱歌の時間に

歌った『えんどうの花』という歌を作詞した人だとわかった。先生は、妹と一緒に山原^{ヤマハラ}に来ていた。その歌詞のなかに「えんどうの花の 咲く頃は／冷たい風が 吹きました／妹おぶって 暮れ方に／苺を取りに 行った山」というところがあった（『えんどうの花』は、一九二四（大正十三年）六月発表。宮良長包作曲。今日でも学校唱歌として歌い継がれている）。

小学校では、女の先生が三、四名くらいで、男の先生の数が多かった。校長先生は今婦仁^{ナキシム}出身の山城ムネオ先生といった。

小学校には大正十一（一九二二）年、満七歳の時に入学した。尋常科が六年、高等科が二年だった。読み方の教科書がハナ、ハト、マメの頃で、これだけでもよう覚えきれなかった。当時から鉛筆も紙もあった。石版は見たことがない。五つ玉の算盤もあった。A組、B組の二組あって、一組四十から四十五名くらいだった。男女共学で、教

室の半分までが男で、もう半分が女だった。

授業では唱歌を歌うのが好きだった。修身の間は、教育勅語を必ず最初に読んだ。勅語はいまでも覚えていて。御真影は、校舎のなかにあって、いつもは扉が黒い幕で隠されていた。そこを開ける時、校長先生は燕尾服を着て、手には白い手袋を着けていた。私たちもいつもと違う服装をした。

皇居遙拝もあった。東京の方角に向かって頭を下げた。勅語を取り出す時はずっとうつぶいているので、奉安殿のなかがどうなっているのか見たことはない。

戦世^{イザナ}の時は、食べ物不足したもの、戦禍に巻き込まれることはなかった。家族や親戚のうちに戦争で死んだ人はいない。食糧やお家は、友軍に取られた。アメリカ軍は食べ物をくれるなど私^{ワタシ}たちに優しくした。友軍は私^{ワタシ}たちのお家を焼きはらったり、食糧を奪っていったりとひどかった。

アメリカ軍が勝ったと聞いたとき、みんなとても喜んだ。

昭和五（一九三〇）年に学校を卒業すると同時に、パナマ帽を作る仕事をした。おばさんが材料を持ってくるので部落の女たち四、五人が集まって作業をした。自宅で作業する人もいた。

できあがった帽子は、またおばさんが回収しに来て持って行った。一回に二十銭から三十銭になった。荒い編み方と細かい編み方があって、荒いものなら一日にかなり作れるため、私は荒いものを編んでいた。パナマ帽は外国に持って行ったようだ。

部落には〈女子青年の集まり〉というのがあった。姉が会長をしていた。十六から二十五歳くらいまでの女の集まりで、結婚すると集まりには来なくなった。部落に〈投書箱〉というのが置いてあって、夜なかにバスに乗って遊びに出かけた、悪いことをしたりすると、匿名の投書が入れ

られた。そういうことがあると集まって話し合った。会長には年上の人になった。風紀の乱れを正すというのがおもな目的だったと思う。部落のなかでお互いに監視しあっていた。二、三十名で、月に一度くらいの割で村家に集まった。夜集まって、十時くらいまで話し合った。集まりの後に遊びに行く人たちがいた。私たちは父親が厳しかったから、遊びに行くことはなかった。

聞き書き、構成

狩野 浩二（沖縄国際大学）

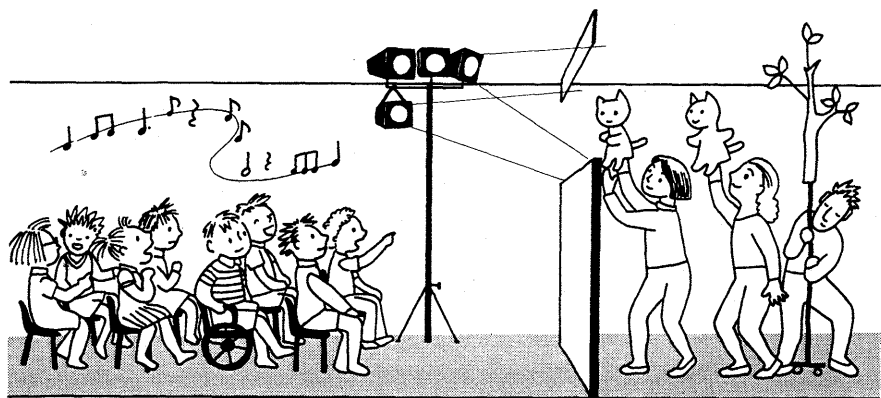
仲里 正雄（那覇市在住）



ここから先は子ども席

——観劇会周辺——

永野 むつみ



カット 山根 裕子 (ひぽぽたあむ)

困ったあいさつ

私たちひっぽたあむの人形劇は、ほとんどの場合、あいさつなしで始まる。そのかわりというわけでもないが、主催者に会の始まりのあいさつと、必要があれば会の主旨や簡単な劇団の紹介をしてもらい、劇のオープニングへとつないでいただく。

言って欲しいこと、言わないで欲しいこと、使って欲しくない表現など、失礼を承知で率直に伝える。しかし、開演前のあわただしさやおっくうな気分から、この打ち合わせを怠ると、始まってからアララということがある。たとえばこんな具合だ。

よくある「あいさつ」

「みなさん、おはようございます。あら、元気がないわね。もう一度一緒に、お・は・よ・う・ご・ざ・い・ま・あ・す。はい。今日は、待ちに待った人形劇の日です。楽しみにしていた人。はい。はい、静かに。シーン。Aちゃん、ちゃんと座っ

て。ちゃんと座ってみられない人には出て行ってもらいます。今日は、人形劇のお兄さんやお姉さんが、朝早くから園に来てくださって準備をしてくれました。でも、みんながうるさくすると、お兄さんやお姉さんは怒って帰ってしまいます。おもしろいときは笑ってもいいですが、あとは静かにしましょう。お口にチャック。いいですか、最後までがんばってみてください。さあ、お兄さんやお姉さんの準備ができたかどうか、みんな聞いてみましょう。では、一緒に。もういいかい」

「お兄さん、お姉さん」

使って欲しくない表現の一つ。よく言われるし、他意がないのもわかるが、なんとも納まりが悪い。「劇団員全員、三十歳をすぎている、お兄さん、お姉さんと呼ばれる年頃ではありませんから、劇団員とか、劇団の方とか言ってください」と頼む。すると「いえ、いえ、まだお若くてお姉さんで十分通り

ますよ」などとお世辞を言われたりする。

「そういうことではなくて、おじさんやおばさんが演っているということに意味があるのです。できれば、おじさんやおばさんになっても演り続けていきたいのです」とくいさがる。大のおとなが本気で演っているということをむしろきちんと伝えたいと思う。

考えすぎてしょうか

日本児童演劇団協議会のアンケート調査によると「三十四歳」で退団するケースが多いらしい。三十四歳と言えば十年以上の実績があり、劇団としては「脂がのって」きてようやく「使える」までに育ってきたと言えるころ。一方個人としては、自分よりひとまわり下の新人をむかえたりして、必ずしも自分が若くないことを知る年齢でもある。ふと周囲の同世代の人と我が身を比べ、このままこうしていいのだろうか、結婚は？ 出産は？ 老後

は？ と、来し方行く末についてしみじみ考える。とりわけ、経済生活に及ぶともはや平静ではいられない。

我が国で、プロと称している劇団は百二十、百五十と言われているが、劇団の収入だけで生活できている劇団員はどのくらいいるのだろうか。ちなみにひばりたあむの場合は、専門的人形劇団とは自信をもって言える。しかし職業的人形劇団と言うには経済的基盤が弱すぎると言わざるを得ない。

「せっかくここまで一緒にやってきたのに」——双方でそう思い合いなから、経済的理由でやめていく劇団員を私たちはとめられない。こうした才能の流出にどこかで歯止めをかけない限り、我が国の児童演劇の質の向上など望めない。

一緒に考えてください

さらにこのところ、週休二日制の一部導入により、学校での演劇教室が、行事の精選ということと

とりやめになるところが増えていっていると聞く。同協議会の調査では、小学校で三割減、中学校で五割減ということだ。学校公演を活動基盤としている劇団の場合、存続そのものがあやうくなっている。これは、それぞれの劇団の問題であると同時に、観客の問題でもあると思うがいかなものだろう。

「自然淘汰」などというおそろしい表現が、同業者の中からも聞こえてくる。しかし、売れている作品、劇団が、そのままイコール残ってほしい作品、劇団なのかどうか。子育てに関わる全ての方々に「どうぞどうぞ、児童劇と児童劇団に関心をもってください」と呼びかけたい。「ソシテ誰モイナクナッタ」などということがないように。

お兄さん、お姉さんと呼ばれてふさわしい年齢の人々の「若気のいたり」にのっかってかろうじて成り立っているような我が国の児童劇の現状をきちんと受けとめたい。

言って欲しいこと

「席を立て、前へ出て来ないこと」

理由は簡単。危険だからということと、一緒に観ている人の邪魔になるからだ。ついでに言えば、ついたての後ろにいる私たちの精神安定上もよくない。舞台前面に垂らした幕をめくられたら、私たちは丸見えになってしまう。スピーカーやライトスタンドが倒れたら事故になる可能性もある。

子どもの側から言えば、嬉しくて、楽しくて、あるいは人形との一体感が欲しくて、気がついてみたらとび出して来ていたところか。その嬉々とした高まりがみてとれるために、おとなの方でも対応が遅れる。それどころか「うちの子はのっで、舞台の方まで出て行っちゃったの」などと手離しで喜ばれたりするむきもある。しかしこれは困る。観客参加型の人形劇ではないのだから。

いったんとび出てきた子どもを、再び客席へ戻すのは骨が折れる。本人の高揚した気分をつぶさ

ず、周囲への迷惑も最小限にとどまるとなのこと。できれば客席をつくる段階から工夫がほしい。ひょぼたあむの場合は、年長児を前列に、年少児は後列に、乳児がいるときは保育者とともに出入口の近くに席を占めてもらう。訳を話してわかる子どもには言葉で、そうではない子どもにはさりげなく条件を整えることで、みんなで楽しむことを保障し合いたい。

たまに、年中児から不満の声が出ることもある。「みんなも年長さんになったら一番前で観られるようになるよ」と言うことにしている。「早く年長さんになりたいね」と、楽しみを後のばしにしてあげることがあっていい。

静かにしなさいとは言わないで

とくに「シート」と言うのをやめてほしい。あれは、うるさい。他人の行動を静止するのだからパワーフルだ。もしかすると本人の想像以上に響き渡る。入場するときから「シート」と言い続けるところも

ある。「静かにしなさいとおっしゃらないで結構です」、そう伝えるために客席へ出ていくと、保育者ではなく子ども同士で言い合っていたりするからとまどう。ピアノに合わせて整然と一列に並んで入ってくることもある。静かなのはありがたいが少々不自然な印象をもつ。

「あ、ここはどこだ」

「ぼくたちの部屋じゃないみたい」

「今日は、何の人形劇かなあ」

期待感を口にしながら入場してくれる方がうれしい。私たちもワクワクしてくる。楽しい気持ちは伝染する。

音楽が鳴り出ただけでキャーッ。室内の照明がおちるとワーッ。幕が開き出すと自然におこる拍手。観劇を自分から楽しもうとするパワーにほっとする。そのとき「シート、静かにノ」では野暮ではないか。危険がない限り、保育者には静観してほしい。というよりむしろ、子どもたちと一緒に心をは



▲「すえっこねこのルウ」

ずませて欲しい。保育者と観客の二つの立場を自在に行ったり来たりできる保育者はすてきだ。くれぐれも、私たちへの気遣いから子どもたちを叱るのは止めて欲しい。子どもたちはどんなにはしゃいでいても、観るべきところは観、聴くべきところは聴くものだ。いい劇とはそうなるように創られている。もしそうではなかったら、それはそれだけの劇でありそれだけの出会いだったということ。もちろん適正な人数での観劇であり、子どもの生理を考えた開演時間、上演時間である場合には——と言わなければならぬが。

泣いてしまった子どもは外へ

「泣くのを止めなさい。外へ出る？ 嫌なら泣き止みなさい。止めなさいって言ってるでしょ。止められる？」

何がきっかけで泣き出したのか、ついたての後ろにいる私にはよくわからない。でも、うるさい。泣

き声ではない。延々と続くおとなの声が耳障りなのだ。

「ちゃんとみるって約束したでしょ。みるの、みんなの」

無理に押し殺した声は、実に人の気をひくものだ。ときには舞台の上のセリフのやりとりよりも注意をひく。

「他の方にご迷惑でしょ。泣くのを止めなさいったら……」

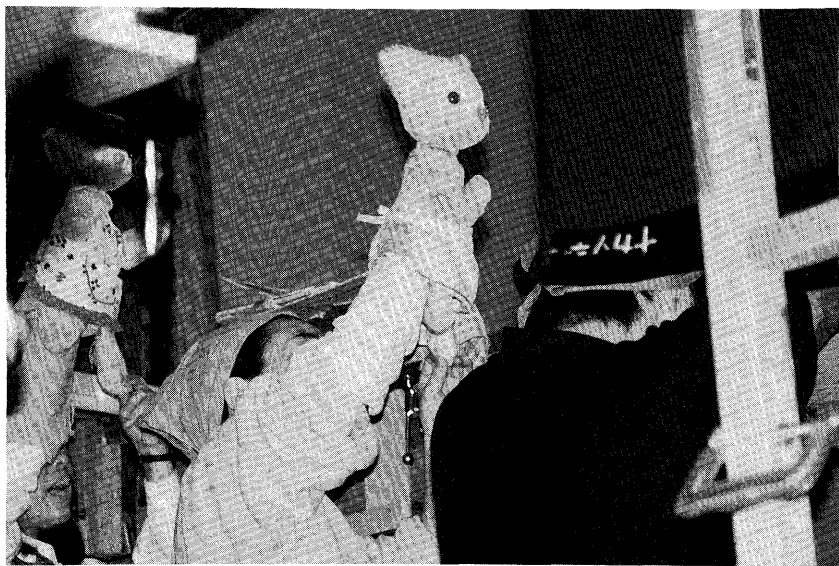
ここまできてようやく、外へ連れ出すことが一番の良策だと気がつく場合と、一段と説得（説教？）が長引く場合とがある。人目が説得に拍車をかけるという感じだ。

彼（あるいは彼女）は何をしているのか。子どもへのしつけか。それともしつけをしているという世間へのアリバイ作りか。つまり保育者（あるいは親）のメンツ優先と言えはいいすぎか。どちらにしても「他の方にご迷惑でしょ」と言いながら、他の

方のことは視野には入っていない。他の方へのご迷惑を最優先させるのなら、まず泣き止ませること。どうやって。それは――、大丈夫と声をかける、手を握る、とりあわない、抱きよせる……などなど。原因がいろいろなのだから泣き止ませ方もいろいろ。臨機応変。個別具体的。とりわけ、こわくて泣いた場合は「こわかったねえ」と丸ごと受けとめる。つまりあやす。はじくより吸収する方がよいような気がする。少なくとも説教はいらない。それでもダメならとりあえず外へ連れ出すこと。落ち着くのを待ってまた戻ればいい。劇場をうすっぺらなしつけの場にしないでと言いたくなるときがある。

子どもは思いのほか恐がりです

室内の照明が消えただけで泣き出す子どもがいる。単に暗やみが怖いのか、それとも以前に怖い思いをしたのか。劇場仕立てになった部屋に入ることさえ嫌がる子もいる。私事で恐縮だが、我がむすこ



▲「すえっこねこのルウ」—— ついたての後ろでは

の例を。

むすこが小学校一年のとき、学童保育所で映画に行った。原爆がテーマのコミックをアニメーション化したもの。平和思想に貫ぬかれた前評判の高い作品であった。ところが帰宅したむすこの表情が暗い。夕飯もすまない様子。私と二人で入浴し、いつものようにホースの先に口をあて水を飲もうとしたむすこが、突然しゃくりあげた。

「あの子たちは、あの子たちは水も飲めずに死んだんだ」

ようやく眠りについてからも何度もうなされ、ビクンと起き上ったりする。

「よほど怖かったんだね」

夫と相談して、翌日郊外の大きなプールへ連れ出した。明るい太陽の下で思いきり遊んだら、少しは元気をとり戻すかしら、と。ところがむすこは、流れるプールを目にしたとたん「あの日と、あの日とおんなじだ」と叫び、座り込んでしまった。浮い

たり沈んだりしながら流れてくる人々の様子が、原爆投下のその日、水を求めて川にとびこんだ被爆者の姿とダブってみえてしまったのだろう。

「大丈夫、二度とあんなことがおこらないようにって父さんも、母さんも仕事をしているんだから……」

なぐさめの言葉がみつからない。また、私たちがなぐさめてすむものでもない。キミはこれからどう生きるのか、映画は、子ども、おとなを問わず、観客一人ひとりに等しく問題をなげかけ、むすこはそれを全身で受けとめた。そういうことだ。しかし、その映画の主要なテーマを受けとめきれず、ただただ残酷なシーンのみが印象に残ってしまったのではないか。そういう意味では、私のむすこには少々早すぎたとは言えないだろうか。映画や演劇をあなどってはいけない。毒にも薬にもなるものだ。その影響力を思うと、子どもに何を観せるか、とりわけ「どの時期に」という問題には慎重でありたい。やはり、観客年齢に上限はないが下限はあると確信する。

観劇会の作品を選ぶとき

ぜひ、下見をして欲しい。観劇が保育の一環として取り組まれるとき、子どもは逃げられない。怖がりの子どももいるのだ。事前にわかつていればサポートもできる。

また、我が国の現状では、保護者に関心がない限り、園や学校での観劇が唯一の機会であることが多い。その重さをあらためて思う。だからこそ、ぜひ下見を！ 下見と称してたくさんの作品に出合っほしいと申しあげたい。保育者として作品の選択眼を拓く——などという目先のことではなくて、演劇のテーマは、まさに人間そのものだから。子育てに関わる全ての方々に、もっと演劇に触れていただきたい。ほかでもない。あなたご自身のために！

(ひばぼたあむ)

ある日の育児日記から

(59)

佐藤 和代



ある日の夕方、近所のSちゃんが来ました。玄関でSちゃんと話をしていた敬は、「Sちゃん、家出してきたんだってさー」とガハガハ笑い出しました。ちょっと、笑ってる場合？ 六歳だって悩みはあるでしょ、デリカシーないわね。

Sちゃんは、理由を聞いても「もうお母さんはお母さんじゃないの」と言うだけ。圭と有は「Sちゃんお泊まりね!」とはしゃいでます。

とにかく子供部屋に押し込み、こっそりSちゃんの家に通話しました。「あ、やっぱりそこにいる? 迎えにいきます」…急いで来たお母さんを

見てびっくり。ロングヘアだったのに、ばっさり切ってショートになっています。「そうなのよ。Sったら、それが気に入らなくて、ヘソ曲げてるのよ」…なるほど。さらさらの長い髪、すてきだったものね。Sちゃんのお母さんだったのね。

まだムスツとしているSちゃんに、「お母さんの髪ステキ! すっごく似合う!」なんて言いながら、私もつい笑いがこみあげ…あ、いけない。



圭も髪をのばしてきて、カットするときは一苦労。

デリカシーはどうした。Sちゃんはしぶしぶ帰っていきます。お母さんはどうやってSちゃんを説得するのやら。「あこがれのお母さん」でいるのも大変ね、と思いつつ見送りました。

我が子らの 集団生活をめぐって

小 蘭 江 幸 子

U子の場合（小二）

長女のU子は、はりきって二年生に進級したはずだった。ところが、帰宅してもパッタリと学校の話をしなくなり、笑顔の出ない硬い表情でおやつを食べるようになってしまった。

通常はもちあがりです二年生になるのだが、この年にかぎり、四クラスが三クラスに減らされ、三十人だった人数が四十人となり、新しい担任、新しい顔ぶれの級友で始まった二年生だった。

親としては様々に推測してみる。うちとけられる級友がみつからないのか、担任の先生になじめないのか、はたまた毎夕十分のピアノのけいこが心の負担になってしまっているのか……。そうしているうちに、朝食後、腹痛が起るようになり、登校時間がおくれ気味になってきた。「学校に行きたくない」と、力なく訴える。一応、教育委員会から配られている不登校のパンフレットのマニュアルどおりに、私もやってみた。夕食の用意にU子と共に包丁

を使いながら、

「どうして学校に行きたくなかったのかな」

「お母さんには、言いたくない…」

「言ってもらわないと助けてあげられないんだがなあ。どの時間が一番つらい時間なの？」

「給食の時と、朝と、休み時間と…」

「授業の時は、大丈夫らしいね。あとはひとりでポツンとしてさびしいのかな」

「そうじゃなくてね」と言いながら、U子はもう泣きじゃくっている。彼女にとってそんなに大変なことだったのかと私も胸をつかれる思いがした。

「前の席のAさんがひどいことを言うの、悲しくて苦しくて、もう我慢できない」

「たとえば、どんなふうに？」

「自分だけすましていい気になってる、とか、そんな上ばきをはいていいと思ってるの、とか…」(U子は前年度の旧式の上ばきを使っていた) U子によれば、一月に二、三回、そのようなことが前の席

から発せられるという。一週間すると席替えがあるので、それまで学校を休みたいとも言った。母も同じ体験があること、思いきってけんかしてもよいこと、あと一週間と思えば、がんばる力も湧いてくる等話してみた。

ところが次の朝、U子は、玄関を出ようとするとき吐気がこみ上げて、とうとう登校できなかった。U子が、心も体も登校できなくなってしまうということが、暢気な私にもようやく理解できた。そして、ここで無理強いすると、親子関係はおろか、U子の心身を傷めつけるのだということも。

すぐに、担任の先生に会い、登校できない旨を、話すと、原因を質問され、重ねて、

「無理に登校させようとせず、行きたくなるまで待つてやってください」と言われる。席がえの日までU子の出席できる時だけ不定期に出席してよい、送りむかえは親がすることを了解し合った。それで、U子には「一時間目の始まる時間に親が送って

行き、四時間目がおわる時にむかえに行く。家で昼食、五時間目に又送ってあげよう」と提案すると

「それでいい」と言う。居合わせた父親が、早速学校に送って行った。父親はその途上で、仲よしの友だちができると楽になっていくこと、すぐにむずかしければ、別の組の仲よしのところへ避難して休み時間をすごすことなど、具体的な知恵を授けたそうだ。

そうして送りむかえをしていたが、二、三日すると、U子は水痘を患ってしまい、治癒した時には席がえも済み、Aさんとは遠く離れた席になっていた。

かくして、U子の不登校は一件落着いたのだが、後遺症らしきものとして、授業ではほとんど手を挙げようとしなない、服装や持ち物を徹底して目だたないものにしようと苦心する等の変化があった。

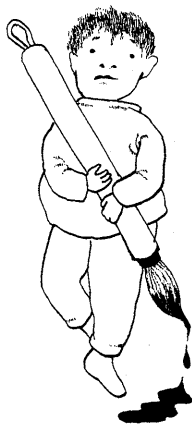
そして、梅雨時のある日、

「Aさんが、傘を持ってむかえにみえたお母さん

と、私を家まで傘にいられておくってくれた」と嬉しそうに教えてくれた。また秋口のある日は、

「帰る時にAさんが、じゃあねって、手をふってくれたんだよ」と心から嬉しそうな顔。放課後、ともに遊ぶ仲間ができ出したのもこのころだったろうか。

U子の言葉を借りると、「二十分休みだけでは、仲よしの友だちなんてつくるのはむずかしい。幼稚園や前の学年の組の人と話すぐらいで精一杯だもの」。授業参観でも感じることもだが、子どもたちは個々の作業をする時間が多く、討論や意見交換を通して、級友の人となり、考えを知することは少なくなっているように思う。覚えること、身につけることとのカリキュラムが一杯で、人として互いに育ちあっていける集団生活には程遠くなってきたのだらうか。それでも、難しさの中で、友達をつくり、心をつなげ、楽しい時を編み出そうとする子どもたちの力を信じたいと思う。



Aの場合（年中組）

Aは、U子と三歳違いの私共の第二子である。

一、二歳代は、人みしりと場所みしりが極めて少なく、迷子になりやすい、母親としては気がかりな成育歴を経ている。三歳近くで、やっと、母から離れがたく、べったりくっつくことが多くなっていたものの、幼稚園最初の年少組では、あちこち好きな所

で時間をすごし、それなりに満足して園での生活をしてきた。

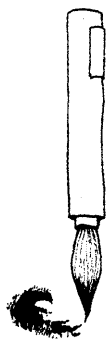
そして、Aも、二年目の年中組の新学期が始まって二週間ぐらいで登園をしぶり始めた。やはり、起床後、腹痛を訴えるのである。便意ではない。気持ちをひきたたせるようになら登園させていたが、起床後、掛け蒲団の上での放尿が二回続いた。一歳代での断乳に前後して夜驚症めいたことが何度あったので、それと似たようなことが、Aの中で起こっているのだろうかとも思った。Aもまた、言葉で表現できない苦しみをかかえているように思われた。担任のN先生からも、Aがトイレでなく「園庭で放尿してしまった」ことをきいた。N先生もAのことでは悩んでおられ、Aの欲求に添わない先生の指示に対して、Aがピントの合わない反応をすることに苦慮しておられた。家庭ですごした三歳までにも、トイレで用を足すこと、食べ物や玩具を投げてはいけないことを教えるのに長時間を費やし、

やっと、いつのまにか治まったAである。集団生活での諸々の約束事をうけいれることに容易でないことは、想像がつく。おたまじゃくしは足が生えれば尾は自然に消えるが、Aは手足や言葉を自由に使いこなす過程もゆっくりで、自己中心の欲求を満足させたい幼なさは、恐竜の尾さながらに太く長くひきずっているように思えてならない。園庭や掛け蒲団の上での放尿は、自分の気持ちとは違うところで行動しなければならぬことに対する、Aなりの心の状態の表明であるようにうけとれた。

N先生は、Aが製作と折り紙を好むことに着眼され、それらのことを最大限保育にとり入れて、Aを喜ばせて下さった。折り紙や製作がたいへんに上達したのはいうまでもないのだが、Aも少しずつ先生の出される指示に折り合うようになっていく。

まだまだ、自分の興味や関心を満たすことに夢中で、お友だちと関わったり、一緒に遊ぶ場面は少ない。けれど、年長での一年間で、どのように人との

関わりを知り、成長していくのか、楽しみでもある。また、なわとびやボール遊びなど、物の動きに合わせて行動することも嫌うので、人や物に自分を折り合わせていくことへの苦手の傾向が、Aの個性なのか、あるいは興味ある変化をとげていくのか、注目したいところである。



Mの場合（三歳四か月）

第三子のMにとっては、U子、Aの姉兄のいる家庭が集団生活のようなものである。そのMは、一歳半の時から、週一度の割合で、母の仕事の日だけ近所の乳児院で半日を過ごしている。この四月からはAと同じR幼稚園の年少にあがるのだが、入園の準

備などで短時間を幼稚園ですぐすと、

「あーあ、僕もみんなに会いたくないなあ」

とつぶやいている。

「みんなって、乳児院の先生やお友だちのこと？」

ときくと

「そう、そう」と言う。母の都合で預けられるというだけでなく、Mも彼の生活の場として、なつかしくなるような温い集団生活をさせてもらったのだと思う。

Mは、乳児のころから自己主張のはっきりした子どもだと思われたが、ことばを話し初めた二歳頃から、私が叱った時、注意を与えた時に必ず、

「お母さんが悪い!!」と言い張る子で、私はつい最近まで驚きあきれ、閉口しつづけてきた。この一年間は、トラブルの半分以上がMをめぐる起り、U子にしてもAにしても少なからずMの私の強さに手を焼いていたと思う。ところが最近、Aに怒られたり、許してもらえなかったりすると、さめざめと

涙をこぼして泣いていることがある。納得できない気持ちを攻撃的に表わすことしかできなかったAであるが、受け入れてもらえない悲しさとして内に向け出したのだろうか。はっきりした変化をみせながら成長していく子だと思う。

MもAもU子も、これからどのような変化をとげていくのか、当然のことながら見当はつかない。けれど、今日一日を、心楽しく、納得のいくすごし方ができれば、自ずと明日一日分ぐらいは元気にきり拓いていく力が湧いてくるものではないかと思える昨今である。

(はるにれの会)



編集後記

森先生に米国幼児教育について書いていただきました。今月の「幼児教育内容の変遷をめぐって」、来月の「現在の幼児教育実践」の二回を通して、「保育を裏付けるもの」を、と一緒に考えてみたいと思います。

＊

保育学会での、津守・堀合両先生の対談を友定先生に報告していただきました。これを読んで、昭和四十年頃の堀合先生の組の「動物園」づくりにまつわるお話を、本田和子先生からスライドを見ながらお聞きしたことが思い出されました。

クジャクの羽根に、当時牛乳の蓋を覆っていた色とりどりのビニール

を使うことを思いつき、各々の家からそれを持ち寄って出来上がったという、みごとに羽根を広げたクジャク。しっぽにビッタリの材料を求めて、大学構内を散歩しながら出来上がったという、しっぽの先に黄色い銀杏のはっぱをつけたライオン。

それらのお話から、みんなが今までの体験を駆使してあれこれと案を出し合っている様子が浮かびます。そのみんなの中に先生もいる。いや、先生が、一番「一生懸命」になっっている様子が彷彿として、私はうれしくなったものです。

私も母親として、子どもと共に生活する中で、「一生懸命」になり、子ども以上に楽しんでいる自分に気づいてきたからです。

その楽しさが味わえないのなら、それは残念なことです。

(A)

幼児の教育

第九十四巻 第十一号

(一九九五年十一月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成七年十一月一日

編集兼発行人 田代 和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二一ー一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 圖書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五一二一ー一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一一四一九

☎〇三ー五三九五一六六〇四

振替 〇〇一九〇一ー二一九六四〇

☆

本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

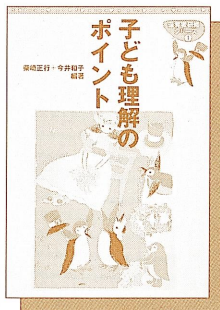
保育者研修シリーズ

- 園内研修資料として最適
- 保育の見直しに役立つ

新しい保育の考え方による保育技術の実践書で、中堅保育者としてこれだけは身につけておきたい保育方法が分かり、保育全体が見通せるようになる。中堅保育者の保育の見直しにも最適。

日常、保育現場で起こる疑問や迷いを、子ども理解、子どもの生活と計画、援助、環境など四種類に分け、それぞれに実践例をつけて問題点に答えたもの。子どもと保育の基本がよく分かる。

① 子ども理解のポイント



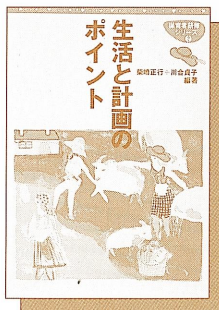
保育は子どもをよく知ることから始まる。子どもの生活の理解、育ち合いの理解、発達の違いの理解、関係の理解などに視点を当て、ベテラン保育者が実践事例をそえて子ども理解のポイントを示したもの。



柴崎正行＋今井和子 編著

B5判・128頁・定価2,000円（本体1,942円）

② 生活と計画のポイント



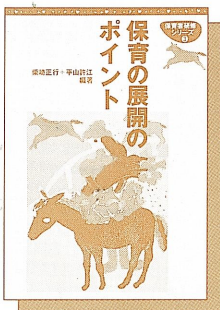
保育計画の作成、計画と実践の見直しをはじめ、教育課程の編成までを書きやすい記録づくり、使いやすい計画づくりに焦点をあてて生活に合わせた計画づくりを解説したもの。子ども中心の保育への見直しに役立つ本。



柴崎正行＋川合貞子 編著

B5判・136頁・定価2,000円（本体1,942円）

③ 保育の展開のポイント



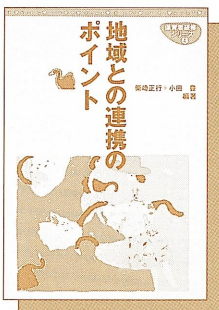
保育実践でむずかしいとされている援助の仕方やタイミングについて解説したもので、子どもの気づきや工夫、発想を生かした展開を中心に園生活の流れにそった展開方法をまとめたもの。子どもをいきいきと生活させる保育の見直しに役立つ。



柴崎正行＋平山許江 編著

B5判・168頁・定価2,000円（本体1,942円）

④ 地域との連携のポイント



子どもの成長は環境の生かし方によって大きく左右される。保護者との信頼関係、保護者の要望と悩み、地域との信頼関係、地域の行事、環境、人材の生かし方、保育者間の連携など、地域に開かれた園づくりのポイントが分かる本。



柴崎正行＋小田 豊 編著

B5判・144頁・定価2,000円（本体1,942円）

キンダーブックの
フレーベル館

手づくり保育シリーズ

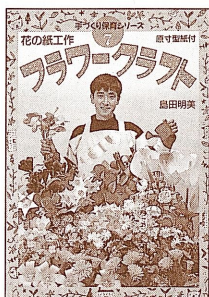


⑥環境構成 赤ちゃんグッズ

八王子保育研究会・著

- 0・1・2歳児のための保育環境づくりに役立つグッズ。
- 保母さんのアイデアが生きている、赤ちゃんにやさしいグッズ。
- 身近な素材を生かして、赤ちゃんの遊びや生活に彩りをそえ、発達をうながす工夫のあるグッズ。

B 5 判・96頁・定価 2,200円 (本体 2,136円)



⑦花の紙工作 フラワークラフト

島田明美・著

- ★身近な花を紙で作って、飾ったり、プレゼントしたり。
- ★サクラ、チューリップ、タンポポ、バラなど31種類。
- ★原寸型紙付。簡単に、きれいに作れるコツを紹介。
- ★用途についての提案も盛り込まれています。

B 5 判・96頁・定価 2,200円 (本体 2,136円)

手づくり保育シリーズ①

歌ってだいすき—湯浅とんぼの遊びうた傑作選—

湯浅とんぼ・著

B 5 判・104頁・定価 2,200円 (本体 2,136円)

手づくり保育シリーズ②

布で作った アイデアおもちゃ

鈴木美也子・著

B 5 判・96頁・定価 2,200円 (本体 2,136円)

手づくり保育シリーズ③

思い出プレゼント

島田明美・著

B 5 判・96頁・定価 2,200円 (本体 2,136円)

手づくり保育シリーズ④

保育に生かす 55の生活アイデア

ほいく♡けんきゅうかい・著

B 5 判・96頁・定価 2,200円 (本体 2,136円)

手づくり保育シリーズ⑤

劇あそびがとびだした

花輪 充・著

B 5 判・104頁・定価 2,200円 (本体 2,136円)

キンダーブックの
フレーベル館